

# 2 ちゃんぽんと長崎華僑



陳 優継  
CHIN Masatsugu

株式会社四海樓  
代表取締役社長

長崎に今も当たり前のようにある中国文化といえば、食では「ちゃんぽん」、祭祀ではペーロンやハタあげなどであろう。近年では「長崎ランタンフェスティバル」が風物詩として定着している。長崎が中国文化を受容する過程で、華僑が果たした役割とはどのようなものだったのだろうか。

## 長崎華僑

華僑の生き方は「落地生根」と表現される。一粒の種が地に落ちて、芽生えて根を張り、枝をつけ、やがて大樹となるように、故郷を遠く離れ、海を渡って異国の地にたどり着き、その地の人々となれ親しみ合う。その地の習慣にもなじみ、家業を起し、家庭を築き子孫を増やし、円満に暮らしていく。やがてはその地の土に帰するさまをいうのである。

いろいろな宗教や文化、風習をもって渡来してきた先人たちは、長崎に根を下ろして寺院や祠堂などを造り、様々な様式を残してきた。中国古来の風習はそのまま伝承され、既に本国では廃れつつあるものが、長崎華僑の暮らしの中に現存している。

華とは中国、僑とは仮の住まいという意味を持つ。私たちは中国籍を持ちながら長崎に暮らし、中国の伝統文化を受け継ぐ長崎華僑なのである。

## ちゃんぽん誕生

1892（明治25）年、こうもり傘一本だけを持って中国大陸から長崎へ渡って来た若者がいた。福建省福州の出身、19歳の陳平順である。平順は「長崎でひと旗揚げよう」と、新地で砂糖貿易商を営む縁者の益隆號をたよってきた。平順は身元保証人の益隆號からお金を借りてリヤカーに反物を積み、行商をしながら資金を貯えていった。1894（明治27）年に始まった日清戦争を機に華僑に対する風当たりが強くなったが、平順は侮蔑の眼差しに耐えながら、無心に働くことで苦境を乗り切った。そして渡航から7年後の1899（明治32）年、明治の初め

まであった唐人屋敷の大門付近にある広馬場に中華料理店兼旅館の「四海樓」を創業した。

平順は、自分が長崎へ渡ってくるときに苦労したことや世話好きの性格も手伝って、中国から渡航してくる華僑や留学生の身元引受人になっていた。そんなとき、食べ盛りの留学生のひどい食生活を見るに見かねて「どうにかしたい」と知恵を絞ってできたのが「ちゃんぽん」であった。安くてボリュームがあり栄養満点の「ちゃんぽん」は、留学生の食生活向上に役立ったばかりか、たちまち長崎中にひろまっていった。

この四海樓で生まれた「支那饅頭」が明治末期には「ちゃんぽん」と呼ばれるようになり、長崎で最も親しまれている麺料理になった。ちゃんぽんのベースは故郷で食べていた福建料理の「湯肉絲麵」である。これは麺を主体として豚肉、椎茸、筍、ねぎなどを入れたあっさりしたスープである。これに平順がボリュームをつけて鶏ガラ豚骨のスープ、長崎産の豊富な具材、唐灰汁を使った独自のコシのある麺を考案したものが「ちゃんぽん」である。

今日では農作物の生産技術や保存技術、流通の発達により食材が年中調達できるが、当時はそういうわけにもいかず苦労していた。そこで、長崎近海でとれる海産物、蒲鉾、竹輪、イカ、うちかき（小ガキ）、小エビ、豚肉、もやし、キャベツを使ったことが「ちゃんぽん」の起りとなった。当初は、季節による食材を使っていたことから「ちゃんぽん一杯で四季が感じられる」料理と評されている。また、長崎の山海の幸を使っていることから、長崎であったからこそ創りだされた郷土料理であり、



写真1 陳平順

長崎で生まれた中華料理といえる。

「ちゃんぽん」が多くの人に食べられるようになってきたある日、平順は娘の清姫から「ちゃんぽん」を商標登録するよう勧められたことがあった。平順は「華僑の仲間や留学生、長崎の人にかかわらず大勢の人に食べてもらえたら、それで満足だ」と言って聞き流した。その後

1907（明治40）年発行の『長崎県紀要』に支那留学生の好物として「ちゃんぽん」が紹介され、1914（大正3）年発行の『長崎案内』にも長崎名物最大流行の第一番として「支那うどん」が紹介されるほどになっていった。もし「ちゃんぽん」を商標登録していたなら、四海樓という長崎の一中華料理店のハウスヌードルとして終わっていたかも知れない。つまり、平順の思いやりの心が「ちゃんぽん」を広めることになったのだ。

また、平順は「ちゃんぽん」の麺を使い「皿うどん」を考案した。使う食材は「ちゃんぽん」とほとんど同じであるが、調理の仕方が異なる。当時は麺ものとなると深い器で食していたが、皿に盛ってだされたインパクトが非常に強く、そのまま「皿うどん」と名づけられた。さらに、太麺の「皿うどん」は調理に手間がかかるため、もっと簡便にできないかと考えられたものが、細い麺を揚げた上から餡かけをした揚げ麺の「皿うどん」である。

## 日中交流長崎史

明では隆慶元年となる1567（永禄10）年、明朝は約200年続けた海禁を解いて、商船の南海方面への出向貿易を許したが、日本への渡航は許されていなかった。そのため、徳川家康は日明勘合貿易を熱望したが実現



写真2 四海樓の「ちゃんぽん」

しなかった。しかし、このことがきっかけとなり福建周辺の貿易業者の間に反響が起り、徐々に来航するようになった。ところが、幕府はキリシタン宗門弾圧及び外国貿易統制の強化から1635（寛永12）年に鎖国をし、交易は長崎に限定して受け入れることとした。

当時は、いわゆる密貿易であったため、明人は自らを「唐人」と名乗ってその存在をばかした。ところが、唐人の名称は広く使われて中国人を指す言葉となってしまった。彼らは長崎華僑の前身となる中国人であった。唐人貿易で最も賑わった時期は、1688～1710（元禄元～宝永7）年に至る22年間で、毎年7～8隻のオランダ船と60数隻の唐船が長崎にやってくる。最も多い時は、唐船は117隻も来航していた。絹糸・織物・漢方薬・砂糖などが輸入され、金・銀・銅が対価として輸出された。途中で俵物（干しナマコ・干し鮑・鱻の鱈など）の輸出が増えている。当時の人口も長崎人約6万人のうち約1万人が唐人であったという。この間、長崎人と中国人の間には親密な関係が築かれるようになり、中国の古の習慣などが自然と長崎の文化に大きな影響を与える環境ができ、ハタあげやペーロンなど様々な風習や行事が生まれたのである。

1689（元禄2）年には、密貿易の防止やキリスト教の取締り、風紀上の問題などを理由に、唐人の市中散宿を禁止し、出島のオランダ人同様に唐人を一定区画に収容することにした。半年の短い期間で約9,363坪

(約36,319m<sup>2</sup>)の土地が造成され、総工費は銀634貫(現在の価格で約7.8億円)かかったとされている。これが唐人屋敷であり、当初に4,888人が収容されたのである。しかし、1858(安政4)年の開港により長崎は唯一の貿易港としての特権が失われ、唐人屋敷の必要性がなくなり、処分されることになる。

現在、長崎の中華街である新地町は、もともとは新地蔵とか新地蔵所と呼ばれ、唐人貿易の倉庫として使われていた。約3年かけて、新しく埋め立てて造られた約3,500坪(約11,570m<sup>2</sup>)の土地なので「新地」と呼ばれた。1868(明治元)年には新地が町名となり、1899(明治32)年に中国人の市街地雑居が許されるようになると、倉庫が店舗や住宅に改造され、しだいに市街地化していった。

### 孫文と長崎

2016(平成28)年、生誕150年を迎える孫文は1913(大正2)年2月13日、山城丸という船で長崎港に入ってきた。臨時大統領に就任した後、袁世凱に大統領の地位を譲り、鉄道総裁としての公式訪問であった。実は孫文は辛亥革命に至るまでに非公式に9回も長崎を訪れている。日本には孫文の支援者が多くおり、長崎華僑の中にも孫文と深くかかわっていた者がいた。

1911年に辛亥革命が起きると、長崎中華商務総会の華僑40余名が西浜町の精洋亭で、中華民国華商統一聯合会の呼びかけに応じて、長崎華僑も孫文の革命

支援をすることに決まった。同年末までに軍資金として4,000円(現在の価格で約500万円)を集め、中国紅十字社を通じて革命軍に贈っている。また、革命支援のために多くの留学生や華僑青年が長崎に集結し、上海に渡って行った。

1カ月以上に及ぶ日本での表敬訪問を終え、3月21日に再び長崎入りした孫文は中国領事館で開かれた歓迎晩餐会で、「日中の国際的同盟、人種の締盟は将来益々必至に迫られるが故に各在留民諸氏も又其の積もりにて益々親密を図り東洋の平和のため、また両国の利益のために大いに努力を希望する」と、列席した20数名の華僑代表に向かって激励の言葉を贈っている。

翌22日には華僑主催の歓迎午餐会が開催された。新地・広馬場では、孫文を歓迎する五色旗が各戸に掲

げられ、道路はアーチ門をつくり、イルミネーションや小旗を張りめぐらして賑やかに飾られた。会場となった館内町の福建会館会議堂に、華僑代表と長崎県知事、長崎市長ら総勢70余名が出席し、大階段で記念写真を撮っている。記録によると、歓迎会に使った費用は料理、楽隊、人力車など556円(現在の価格で約70万円)。参加費は一人3円(現在の価格で約3,800円)とリーズナブルで、不足分は福建会館、三江会所と広東会所が拠出している。実はこの午餐会の料理を四海樓が担当している。そして、孫文は帰国に際して、長崎華僑の熱烈的な歓喜に答えるために、わざわざ新地・広馬場を20数台の車で迂回し、四海樓の前を通過して長崎港へ向かっている。

### 伝統文化から新しい文化へ

毎年百万人近くが訪れる冬のイベント「長崎ランタンフェスティバル」は、1984(昭和59)年に長崎新地中華街の東西南北の入口に牌楼門(中華門)が完成したことをきっかけに、翌年から街の振興のために長崎新地中華街の人たちが、中国の旧正月を祝う「春節祭」を開

催したことが始まりとなった。その後1992(平成4)年に会場を湊公園に移し、少しずつ規模を拡大してきた。翌年には長崎市から「春節祭と一緒にイベントとして拡大していかないか」との提案が持ち掛けられたことで「長崎ランタンフェスティバル」と改称し、長崎の冬を彩る一大風物詩として現在に至っている。

期間中は長崎新地中華街はもとより、メイン会場の湊公園、中央公園、孔子廟、浜市・観光通りアーケードなどの市内中心部に約1万5千個にも及ぶランタン(中国提灯)が飾られ、各会場には干支をかたどった大型オブジェが所狭しと並んでいる。

私は常日頃から伝統や文化、しきたりは「生き物」だと感じている。時代と場所によって名称や解釈までも変化や変容し続ける、まさに生き物である。普遍的なものだと信じているものは、実は人が受け継ぐものなので、いろいろな要因で少しずつ変わってしまうのである。長崎は伝統・文化をしっかりと継承しながらも自由闊達に受容し、新しいものを生み出す風土がある。そして、和洋中の折衷ともいえる長崎の文化は「和華蘭文化」と言われるようになった。



写真3 福建会館大階段での孫文記念写真(大正2年)



写真4 明治・大正期の四海樓



写真5 現在の四海樓



写真6 長崎ランタンフェスティバル